

2022 年度 中間授業アンケート 結果速報

「授業時間外学習が約 15%減少」

2022/05/16(月) 09:00 ~2022/05/21(土) 23:59 にかけて、ポータルサイト(ユニバーサルパスポート)による中間授業アンケートが実施されました。設問数は 6 問(多肢選択式 5 問、自由記述式 1 問)です。回収率は、61.2%となり、昨年(60.9%)とほぼ同程度の回答を得ることができました。結果は表の通りです。

No.	設問(そう思う:5 点/どちらかといえばそう思う:4 点/どちらともいえない:3 点/どちらかといえばそう思わない:2 点/そう思わない:1 点)	平均点
1	この科目のこれまでの内容について良く理解できている。	4.14
2	この科目の 1 回(1 コマ)あたりの授業時間外学習(課題取組やグループ活動時間等を含む)の平均時間 (5 点:120 分以上/4 点:90 分以上 120 分未満/3 点:60 分以上 90 分未満/2 点:30 分以上 60 分未満/1 点:30 分未満)	2.29
3	この科目の授業方法は、理解を促したり考えさせたりするための工夫がなされている。	4.21
4	この科目の授業資料(板書・教科書・スライド・動画・その他配布資料等)は、自身の学びに役立っている。	4.25
5	この科目の課題およびフィードバックは、自身の学びに役立っている。	4.16

表 2022 年度中間授業アンケート結果(全科目)

ご覧いただいて分かる通り、前期中間地点で概ね肯定的な回答となっております。なお、No.1 理解度、No.5 のフィードバックについては昨年度の中間授業アンケートでも確認していますが、それぞれ 4.16 点、4.11 点であったことを考えると、昨年と同様の受け止めがなされていることが分かります。

一方、No.2 の授業時間外学習について、昨年の中間アンケート平均点は 2.68 点であったことから、昨年対比で約 15%減少していることとなります。昨年度の前期前半は新型コロナウイルスの第 4 波の影響もあり、遠隔授業が積極的に行われていました。今年度は状況が改善してきており、対面授業も昨年度に比べて増えてきている状況です。教員が提示する課題の減少や、移動時間やアルバイト・サークル活動時間の増加による影響がもたれませんか。これはあくまで平均点からの考察であるため、一概には言えませんが、各科目で学生の理解度が不足しているようであれば、授業外学習を促すような工夫を考えてみてはいかがでしょうか。

なお、昨年の授業アンケートでは、授業の理解度は中間から期末にかけて 4.16 点から 4.26 点へと上昇しました。2021 年度全学 FD 学習会アンケート結果では、74%の先生が中間授業アンケート結果を授業改善に活かしていただいたことが明らかになっています。今年度もまた、ご担当の授業科目の中間授業アンケート結果を参考にさせていただき、よりよい授業づくりを試みていただければ幸いです。

2022年度 第1回 たちばな教育サロン 開催報告

2022年6月1日に、本年度第1回目の「たちばな教育サロン」をオンラインで開催し、教職員含めて31名の方にご参加いただきました。今回は「講義科目の工夫～親しみ難い“概論”編～」をテーマとし、理学療法学科の兒玉先生と、児童教育学科の佐野先生より事例報告をいただきました。事例報告の後は、ブレイクアウトルームを活用し、参加者同士でざっくばらんに意見交換する時間を設けました。

以下は、事例報告のポイントをまとめたものです。一部の報告動画は、[教育開発・学習支援室WEBサイト「学内FD関連動画」](#)からもご覧いただくことができます(パスワードはメール本文に記載させていただいております)。何かしらの参考になれば幸いです。次回は11月2日(水)4時間目を予定します。ご都合がつかうようでしたら是非ご参加ください。お待ちしております。

報告1:「興味」と「五感を使う」ための授業作り

理学療法学科 教授 兒玉 隆之 先生

兒玉先生からは、約100名の学生が受講する講義科目「リハビリテーション概論」での実践事例をご報告いただきました。兒玉先生は脳・神経科学の研究者であり、その知見をフル活用した大変興味深い授業を展開していらっしゃいます。

例えば、「**教材への書き込みは赤ペンを使え!**」という指示です。学生の中には沢山の色ペンを使ってテキスト等に書き込みをする者もいますが、得てして何が大事かわからないようなノートの取り方になってしまいます。赤ペンを使って書きこみをした場合と、青ペンを使って書きこみをした場合では、前者の方が学習を担う脳領域が活性化するという研究成果を紹介しながら、ノートの取り方の指導をしておられます。

兒玉先生の授業成功の大きなポイントが「**サブノート**」の存在です。先生がオリジナルで作られた学習材(印刷室で人数分印刷して学生に配布)なのですが、重要事項が分かりやすくなっているだけでなく、ところどころ穴埋め式になっています。また、理論の横に、自分の解釈や考えを記入する欄を設けて、知識をただ詰め込むのではなく、そこに**どのような意味があるのかを考えさせるノート**になっています。さらには、他の学生の意見をまとめて記入し、それについて自分の考えを書く欄まで用意されています。もっと勉強したい人のためにと、関連する参考文献も記載されていますが、ご丁寧にその文献にスマートフォンからアクセスするための**QRコード**まで付いています。そして、その横には「提出用」と書かれたQRコードがあります。これは、先生にメールを送るためのQRコードです。自分が作成したノートの写真を撮り、このQRコードを使って先生にメールで送るという仕組みなのです。アナログとデジタルを融合させたサブノートに多くを学ばせていただきました。

報告2:「音楽を言葉で表現する試み」

児童教育学科 教授 佐野 仁美 先生

佐野先生からは、約70名の学生が受講する講義科目「音楽概論」での授業実践をご報告いただきました。たださえ沢山のことを伝えなければならない科目であるにもかかわらず、制度変更によって半分の授業時間しか割くことができなくなってしまったことに苦心しつつも、「音楽を言語化する力を養う」という本質的な教育目標を常に意識した授業づくりをしていらっしゃいます。

先生の授業の工夫の第一には、「**映像教材**」を活用することがあります。音楽なのだから映像は不要と思われるかもしれませんが、しかし、最近の学生が馴染みのない音楽に親しみを感じられるようにするためには、小学校の教材と講義内容に明確な関連性を持たせることとともに、彼らが慣れ親しんでいる映像との組み合わせが効果的です。

第二の工夫は、「フィードバック」を積極的に行うことです。70名の学生に対するフィードバックは本当に大変です。しかし、詳細なコメントをつけるのではなく、「Good」や花丸をつけたり、「どうしてこう感じた?」「ここはどういう意味?」など簡素なコメントをつけることで効率的に個別フィードバックするようにしています。**発問式のフィードバック**は特に効果的で、徐々に学生が書いてくるレポートの文字量が増えていき、質も良いものに代わっていきます。言語化は繰り返しのトレーニングが欠かせませんが、ただ繰り返せばよいというものではありません。課題とフィードバックを通じた教員と学生のコミュニケーションが高い教育効果を生み出しているといえます。

先生方、貴重なご報告を誠にありがとうございました!